２０２４年度

第１回一般入試

時間５０分　１００点満点

国　　語

受験上の注意

１．試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
２．実施時間は５０分で、１００点満点です。時間配分に注意して解答してください。
３．解答は解答用紙にていねいに記入してください。
４．解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
５．試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
６．私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿　　座席番号 ＿＿＿＿＿＿＿＿

名　　前 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

聖学院中学校

問題は次のページからはじまります

一　次の各問いに答えなさい。

問一　傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

1　東京二十三区でこの冬初のセキセツが観測された。

2　熱い紅茶にミルクとサトウを加える。

3　小包をユウソウする。

4　ジキュウリョクをつけるためのトレーニング。

問二　次の格言の空欄に入る語としてふさわしいものを前後の文脈をふまえて考え、記号で答えなさい。

1　「他人のように上手くやろうと思わないで、自分らしく（　1　）しなさい」　大林宣彦（映画監督）

2　「何か新しいことをやる、それはすべて（　2　）だと、僕は思うんです」　植村直己（冒険家）

3　「目の見える人間は、見えるという（　3　）を知らずにいる」　アンドレ・ジイド

（フランスの小説家）

ア　退屈　　イ　冒険　　ウ　幸福　　エ　失敗

二　次の文章は今村夏子「モグラハウスの扉」の一部です。学童に通っているわたしたちは、工事現場の作業員であるモグラさんと仲良くなり、学童の帰りには必ず工事の現場に立ち寄るようになりました。その後に続く文章を読み、後の問いに答えなさい。

その日の帰り道、いつものように工事現場に立ち寄ったわたしたちは、今日、学童の先生が、モグラさんそっくりな男の人の絵を描いたことを、モグラさん本人に話した。わたしはランドセルのなかから実際にその絵を取りだして見せた。

「全然似てないね。おれのほうがカッコイイ」

モグラさんはそういったが、A珍しくニヤニヤとしながら、「これ描いた女の先生ってどんな人？」といった。わたしたちは口々にみっこ先生について説明した。

やさしくて、明るくて、おもしろくて、字がきれい。学校の近くに住んでる。苗字は松永だけど、わたしたちもわたしたちの親も、みんなみっこ先生と呼んでいる。お父さんと二人暮らし。筋肉ムキムキが好きで、いつも長いスカートをはいている。髪は短い。年はたぶんモグラさんと同じくらい。

「美人？」モグラさんがきいた。

少しの間が空き、「普通」と友哉君がこたえた。「目の下にホクロがある」

「ふうん」

その日、モグラさんはガムを一枚ずつくれた。はずれのミントガムだったので、からいのが苦手な栄

太郎君はその場で食べずに制服のポケットに仕舞った。そしてそのまま忘れていたらしい。翌日の学童でみっこ先生に見つかった。

先生は栄太郎君のポケットからぽろりと床に落ちたガムを拾い上げ、「こらっ。だめじゃない」と頭をこづいた。栄太郎君はこづかれたところをぽりぽりとかきながら、

「もらったんだもん」といった。

「誰にもらったの」

「モグラさん」

「またモグラさんなのね。知らない人から食べ物をもらっちゃいけませんっていってるでしょう」

「知らない人じゃないよ。モグラさんだもん」

「モグラさんの誕生日は」

「知らない」

「ほらやっぱり知らない人じゃない」

「知ってるもん。毎日工事現場で会ってるんだから」

「それはどこの工事現場？　Bわたしの大切な子供たちにガムをあげないでくださいってお願いしといたほうが良さそうね。学校の近くなの？　誰か先生を案内してくれる人」

栄太郎君、あやちゃん、友哉くん、わたしの四人が手を挙げた。

毎日一緒に帰っているメンバーだが、そこにみっこ先生が加わるだけで、いつもの帰り道が遠足の道中

のような、ウキウキとした空気に包まれた。栄太郎君はみっこ先生と手をつないで歩き、モグラハウスがどれだけ魅力的なところか説明していた。

「まあ。地面の下にボウリング場が？」みっこ先生はC目を丸くした。

工事現場に差しかかると、みんな一斉に同じ方向を指差した。

「あの人だよ」

オレンジ色のフェンスの向こうに、スコップを肩に担いで歩くモグラさんの姿があった。

「あの人なの？」

みっこ先生の動きが一瞬止まった。想像していた感じと違ったのか、「ぜんぜんモグラに似ていないじゃない」といった。モグラに似てるなんて、誰もひと言もいっていない。

ほんとに？　ほんとにあのスコップ持ってる人？　そのあともみっこ先生はしつこいくらいに確認した。白いヘルメットの？　一番日焼けしてる人？　そして隣を歩いていたわたしに顔を寄せ、「先生口紅ついてない？」ニッと歯を見せた。

口紅と、青のりのようなものがついていた。指摘すると、ブラウスの袖でごしごし前歯をこすり、もう一度ニッとした。

みっこ先生はスカートをぱんぱんとはたき、前髪を手でとかして背すじを伸ばした。

栄太郎君が大きく手を振りながらモグラさんの名前を呼んだ。振り向いたモグラさんは、子供たちのなかに大人の女性がひとり交じっていることに気づき、一瞬、D眉間にしわを寄せた。そのせいかいつもよ

り恐(こわ)い顔になった。
「先生連れてきたよ」栄太郎君がいった。
モグラさんはスコップを肩から下ろすと、とりあえず、といった感じでみっこ先生に無言でぺこっと会釈(えしゃく)した。
みっこ先生は丁寧(ていねい)にお辞儀(じぎ)を返した。「学童の松永です」よそゆきの声だった。
「みっこ先生だよ」と栄太郎君がいった。
「ああ、へえ……」
モグラさんはあらためてみっこ先生の顔を見て「どうも」ともう一度頭を下げた。
「この子たちがいつもお世話になっているそうで」みっこ先生がいった。
「いえ、そんな、お世話なんか」
「Eご迷惑(めいわく)をおかけしているじゃないかと気になってたんです」
「いえいえ、大丈夫(だいじょうぶ)ですよ」
「ここのところ急に暑くなってきたから外でのお仕事は大変でしょうね」
ガムのことをいうのかと思っていたが、みっこ先生の口からでてくるのは関係のない話題ばかりだった。モグラさんはうつむき加減にはあ、とか、まあ、とかF相槌(あいづち)を打っていた。みっこ先生のおしゃべりは続いた。
「それにしてもお若い方でびっくりしました。失礼ながら、わたし、この子たちの話からもっと年配の方

を想像してました」
「そうですか」
「それにあだ名がモグラでしょう。どうしてモグラなんですか」
「モグラだからモグラなんだよ」と栄太郎君がいった。
「またいってる。ばかだなあ」友哉君がいった。
「こら」みっこ先生は友哉君をにらんだが、声はよそゆきのままだった。
「今は人間のふりしてるけど、ほんとはモグラなんだよね。そうだよね」
栄太郎君に見つめられ、モグラさんは頭をかきながら「いや、まあ、うん」とうなずいた。
「まあほんとに」みっこ先生がいった。
「うそに決まってるじゃん」と友哉君がいった。
「うそじゃないよ」と栄太郎君がいった。周りの作業員たちを指差して、「あの人もあの人もみんなモグラなんだよね」
モグラさんは周りを見回し、うなずいた。「そうだよ、みんなモグラだ」
「まあ。みなさんモグラで……」
みっこ先生はフェンスの向こう側にいる作業員たちを見回した。
「先生、まさか本気にしているの？」友哉君はあきれたようにいった。「信じちゃだめだって。モグラさんはふざけてるだけなんだから。うちのお父さんもモグラさんのいうことはでたらめだっていってるよ。

モグラハウスなんてないって。この人たちはずっと下水道の工事をしてるんだって。工事が終わったらぼくんち水洗トイレになるんだって」

「あら、水洗に。いいわねえ」

「うちも来年水洗トイレになるよ」とあやちゃんがいった。「でもね、モグラハウスはあるって。お母さんいってたよ」

「ねえモグラさん。うそじゃないよね」栄太郎君はマンホールの穴を指差した。「あれがモグラハウスの入り口だよね。この下に、モグラハウスがあるんだよね」

モグラさんはうなずいた。「そうだよ」

「うそだ」友哉君がいった。

「ほんとだよ」

「じゃあ、モグラさんはこの下でご飯食べたりテレビ観たり眠(ねむ)ったりするってことだね」友哉君がいった。

「そう」モグラさんはうなずいた。

「どうやって寝(ね)るんだよ。地面の下で」

「ベッドで」

「ベッドがあるのかよ」

「あるよ。昨日運び入れた」

「うそだ」

「ほんとだって」
「どんなベッド。色は。形は。大きさは」
「特大のベッド。形は四角。シーツは水色」
「絶対うそ」
はい、はい、ストップ、ストップ、とここでみっこ先生が止めに入った。
「そんなにいうなら友哉君。先生が見てきてあげる。このおにいちゃんがうそつきかどうか、今から先生がたしかめてきてあげる」
そういうと、オレンジ色のフェンスに手をかけた。
みっこ先生はヨイショ、ヨイショ、といいながら、横並びに立つフェンスのうち一枚をじりじりと動かして、人ひとりが通れるくらいのすきまを作った。そこにするりと体をすべりこませると、モグラさんの前を横切り、ぽっかり口を開けたマンホールのそばに立った。スカートのすそが汚(よご)れるのも気にせずに、その場に両ひざをついてしゃがむと、モグラさんの顔をチラと見上げ「いいですよね」といった。
「あ、ハイ……」
周りの作業員は気がついていなかった。みっこ先生は片足をマンホールの穴に差し入れると躊躇(ちゅうちょ)するそぶりも見せずに、そのままスッ、スッ、とはしごを使って降りていった。顔だけわたしたちのほうを向いていて。見えなくなるまでニコニコと笑っていた。
みっこ先生の頭のてっぺんが完全に穴のなかに隠(かく)れると、G急にあたりがしんとした。

Hモグラさんは真剣な表情で、立ったままマンホールのなかをのぞきこんでいた。わたしたちはフェンスの網目越しに、みっこ先生が消えていった穴の入り口を見つめていた。

数秒たった。

突然、「すっごーい」と足下から声が聞こえた。

すごい、すっごーい。ほんとにベッドが置いてあるー。テレビも大きいー。わあー。こっちはお風呂場だあー。広ーい。迷路みたーい。

わたしたちは息を呑み、顔を見合わせた。Iモグラさんが穴をのぞきこみながらフフッと笑った。

みっこ先生は入っていった時とまったく同じ笑顔で穴からでてきた。

「ほんとにベッドが置いてあったの？」「広かった？」「何部屋あった？」「ぼくも見たい」「ボウリング場見た？」「ファミコン何台あった？」栄太郎君とあやちゃんからの質問攻撃に、みっこ先生は乱れた髪をピンで留め直しながら、

「すごおーく広かったわよ。水色のシーツの、大きなベッドが置いてあった。モグラさんはあのベッドで寝るのね。他にもたくさん部屋があってとても数え切れなかった。栄太郎君が教えてくれた通りね。ゲーム部屋もお菓子部屋もおもちゃ部屋もあったわよ。もちろんボウリング場もあった。色んな色のピンがずらっときれいに並んでるの。木下ボウルより広かったと思うわ。隣にはレストランもあったし、サッカー場も野球場もプールもあった。すべり台もブランコもあったし、とにかく全部あったの！　あー楽しかった。モグラハウスって天国ね」

といった。
栄太郎君が「ぼくも見たい！」といった。
「完成したらな。今はまだつくりかけだから」とモグラさんはいった。
「ねえ、ぼくの部屋はないの？　ぼくもモグラハウスに住みたいよ」
「いいよ。住みな」
「あたしも住みたい！」あやちゃんが手を挙げた。
「いいよ。住みな」
わたしは「わたしも！」といった。先ほどのみっこ先生を見る限り、心配していたはしごの昇(のぼ)り降りはそれほど難しくなさそうだ。
「いいよ」とモグラさんがいった。
「みっこ先生は？　先生も一緒に住もうよ」
「うん、先生も一緒に住みたいわ」
「いいですよ」
「Jじゃあ、ぼくも……」と、最後に友哉君が手を挙げた。

今村夏子「モグラハウスの扉」

問一　文中傍線部C・D・Fの意味として最も適切なものを、それぞれ記号で答えなさい。

C「目を丸くした」

ア　意外なことに驚(おどろ)きを隠せずにいる様子。

イ　相手に合わせるために大げさにふるまう様子。

ウ　考えたこともなかった事に我を忘れる様子。

エ　相手の話題に合わせるためにわざと驚く様子。

D「眉間にしわを寄せた」

ア　子どもたちのなかに、いつもと違う大人がいることに緊張(きんちょう)している。

イ　子どもたちが、大人を連れてくることへの不満を感じている。

ウ　大人にあげるガムがないので、どうしようかと困惑(こんわく)している。

エ　子供たちにガムをあげたことを注意されると不安を感じている。

F「相槌を打っていた」

ア　相手の気持ちをおしはかって遠慮（えんりょ）をする。

イ　相手の話に調子を合わせて受け答えをする。

ウ　相手の話に合わせてひたすらに聞き役となる。

エ　相手の話に納得するようにつとめる。

問二　文中傍線部Aのモグラさんの表情から読み取れるモグラさんの気持ちの説明としてふさわしいものを次より選び、記号で答えなさい。

ア　全然似ていない絵ではあるが、このように自分のことをみんなで話題にしていることに関心を持っている。

イ　学童の先生という大人が描いたにもかかわらず、全然似ていないので半ば呆（あき）れた気持ちを何とかおさえている。

ウ　全然似ていない絵ではあるが、毎日のようにここに来てくれて仲間の一員として認める子供たちをいとおしく感じている。

エ　毎日のように来てくれることに感謝をしつつ、このような全然似ていない絵を見せられて困惑している。

問三　文中傍線部BからEのように、モグラさんに実際に会って先生の気持ちは大きく変わりました。なぜこのように変わったのですか。先生の態度や様子を読み取って説明しなさい。

問四　文中傍線部Gについて、次の（　1　）と（　2　）の問いに答えなさい。

（　1　）　この場での子供たちの気持ちはどのようなものと考えられますか。作品の流れから考えて答えなさい。

（　2　）　このような場面をあらわす表現を次から選び記号で答えなさい。

ア　鳥肌（とりはだ）が立つ

イ　腹が据（す）わる

ウ　固唾（かたず）を飲む

エ　心ここにあらず

問五　文中傍線部Hの「真剣な表情」のモグラさんの気持ちはどのようなものであったと考えられますか。次より選び、記号で答えなさい。

ア　先生がどのような反応を示すのか緊張（きんちょう）している。
イ　危険な工事現場に入ることを認めてしまい後悔（こうかい）している。
ウ　モグラハウスがあることにしてほしいと願っている。
エ　モグラハウスがないことが明らかになる瞬間を恐（おそ）れている。

問六　文中傍線部Iのモグラさんが笑った表情から読み取れる気持ちを次より選び、記号で答えなさい。

ア　意外なことに、先生がモグラハウスを認めてくれたことに驚く気持ち。
イ　先生のふるまいにほっとして、先生に対しても心をひらく気持ち。
ウ　工事現場の危険な場所に入ることを許可してしまったが、無事に戻（もど）り安心した気持ち。
エ　大人である先生までもがモグラハウスを認めたことで、子どもたちに自慢（じまん）したい気持ち。

問七　文中傍線部Jの態度から友哉君の人柄（ひとがら）がはっきりと読み取ることができます。どのような人柄か説明しなさい。

問八　文中波線部の表現から、子どもたちにとっての「みっこ先生」とはどのような存在と読み取れますか。問題文全体から考えて答えなさい。

三　次の文章と表と図を読んで、後の各問いに答えなさい（解答に際しては、句読点も1字と数えます）。

問題作成にあたり、本文の表記の一部を変更（へんこう）しています。

江戸（えど）時代には、A「七歳（さい）まで（「七つ前」ともいう）は神のうち」という観念がありました。人は神の世界からこの世に生を受け、死後はまた神の世界に帰っていく存在であり、七歳までの子どもはいまだ神の世界とのつながりを保っていると考えられたのです（ただし、これには否定的な見解もある）。江戸時代の乳幼児死亡率は今日よりもはるかに高く、二、三割もありましたから、子どもはまだ人間界に定着しきれない存在だと認識されていました。江戸時代には、新生児を人為（じんい）的な方法で死なせる「間引き」が行われましたが、これも新生児を殺すのではなく、神の世界に戻（もど）すのだと考えられました。「間引き」は「子返し」とよばれることが多かったのです。

しかし、太田素子氏によれば、江戸時代を通じて、こうした子ども観は大きく変わっていきました。B生まれたときから子どもを一人の人間と認めて、愛情深く育てていこうという姿勢が強くなったのです。そのため、お七夜（子どもが生まれて七日目の祝い）・宮参り（子どもが生まれて後、はじめて村の神社に参詣（さんけい）すること。生後何日目に行なうかは地域と時代によって差があるが、たとえば男子は三一日目、女子は三三日目などに行う）・食い初（ぞ）め（生まれて一〇〇日目または一二〇日目の乳児に箸（はし）を持たせて食べるまねごとをさせる祝い）・初誕生・初節句などの生育儀礼（ぎれい）が大事にされ、家族・親戚（しんせき）・村人たちがともに子どものすこやかな成長を願い祝うようになりました。そして、「間引き」は許されないものとする観

念が普及していきました。小児の生存権を保障し、生まれた子どもには惜しみなく愛情を注いで育てるという、今日の家族に通じるような子ども観がしだいに広まっていったのです。子どもは「子宝」となりました。その背景には、生活水準の向上と医学の発展による乳幼児死亡率の改善という状況がありました。

ただし、江戸時代の子育ては、わが子を家のりっぱな継承者とするために、家業をきっちり教え込むというところに主眼があり、子どものやりたいことを自由にやらせるという方向には向かわなかった点にも注意が必要です。子育ての最終目標は、家の存続、繁栄におかれていたのです。ここにも、百姓にとっての家の重みが現れています。

七歳前後になれば、以後年を追うごとに生命力は強くなっていきます。そこで、このころから、子どもたちは村人としての社会性を身につける一方、寺子屋に通って基礎的な知識を学びました。なお、寺子屋は、江戸時代には手習所・手習塾とよばれるほうが一般的でしたが、本書では広く親しまれている寺子屋の呼称を用います。

寺子屋は、一八世紀後半以降急増します。明治一六年（一八八三）の調査によると、当時全国で一万六五六〇軒の寺子屋が確認されていますが、実際はその数倍あったと考えられています。平均すると、一村に一つくらいは寺子屋があったのです。

寺小屋の師匠には、僧侶や神職、あるいは村の有力百姓などがなりました。一軒の寺子屋に師匠は一人、子どもは数人～数十人というところが多かったのです。男女とも数え年五～九歳で入学しました。ふつう、五、六年間在学しましたが、一、二年でやめてしまう子もたくさんいたので、一概には言えません。女子

のほうが、就学率が低く、就学年数も短い傾向にあったようです。また、農閑期だけ通い、農繁期には寺子屋を休んで、家の農作業の手伝いをする子も大勢いました。江戸時代には庶民の義務教育制度がなかったので、就学形態は各家の事情によってまちまちであり、寺子屋にまったく行かない子もいたのです。

寺子屋では、読書・書道・計算を中心に教えました。「読み・書き・そろばん」です。寺子屋教育の特徴としては、①学力の習得と並んで子どもの人格形成を重視したこと、②子どもの主体性を尊重し、体罰による強制などはほとんど存在しなかったこと、③画一的な一斉教授ではなく、子どもの年齢や学習進度に合わせた個別教授が行われたこと、などがあげられます。

よく、江戸時代後期には寺子屋が普及し、庶民の教育水準が向上したため、日本は明治以降の近代化をスムーズに進めることができたのだといわれます。これは一面で正しいのですが、実態はより複雑なものがありました。では、江戸時代の後期の百姓は、いったいどの程度読み書きができたのでしょうか。以下、リチャード・ルビンジャー氏の研究によって、みてみましょう。

明治一四年（一八八一）に、長野県北安曇郡常盤村で、八八二人の成年男子を対象に、読み書き能力の調査が実施されました。この調査では、読み書き能力を六段階にわけて調べています。その結果を示したのが、表８です。

ここから、当時の常盤村には、まったく読み書きできない人から、政府の布告や新聞の社説まで読みこなすことができる人まで、（　　あ　　）ことがわかります。けれども、多数の人は、まったく読み書きできないか、自分の住所氏名が書ける程度にとどまっていました。

ただし、江戸時代後期から明治初年にかけて、まったく読み書きできない人は（　　い　　）しています。これは、寺子屋教育の成果だといえます。一方、より高度な読み書き能力をもつ人は、（　　う　　）。

当時の常盤村の村人たちは、読み書き能力でいうと、①読み書きのできない人たち、②ごく基本的な読み書き能力（能力水準二、三）を身につけた人たち、③より高度な読み書き能力（能力水準四～六）をもつ人たち、の三通りにわかれていたのです。

第二水準以上を読み書きができる者とすれば、その割合は、一八五〇年代に（　　え　　）パーセント、一八七〇年代に七六パーセントとなります。他方、第四水準以上を読み書きできる者とすると、一八五〇年代で七パーセント、一八七〇年代で八パーセントにすぎません。どのレベルをもって識字能力ありとするかによって、識字率の数値には大きな差が生まれてくるのであり、Cこの点に注意が必要です。

常盤村の調査から少し遅（おく）れて、鹿児島・岡山・滋賀の三県で、自分の名前を読み書きできない人の調査が行われました。調査対象は、県内の六歳以上のすべての男女でした。その結果は、図2のとおりです。

ここでは、地域差が明確に出ています。また、男女差も各県でそれぞれ二〇～五〇パーセントくらいあり、男女格差も軽視できません。しかし、地域差のほうがより大きく、滋賀県の女性は鹿児島県の男性よりも、非識字率（読み書きできない人の割合）が低かった、すなわち読み書き能力が高かったのです。また、各県の内部でも、地域ごとに非識字率には差がありました。

以上は、明治になってからの調査結果ですが、江戸時代後期の実態をかなりの程度伝えていると考えられます。そこからは、江戸時代庶民の読み書き能力を考えるときには、全国平均の数値を問題にするより、

その内部における地域差・男女差・階層差に注目することが大切だということがわかります。教育水準の非均質性こそが、江戸時代の特質だったのです。

渡辺尚志「百姓たちの江戸時代」

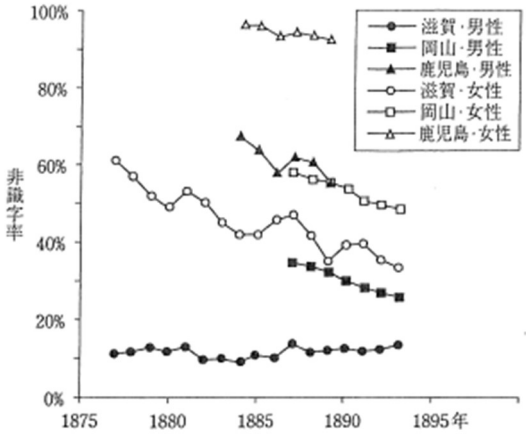
表８　年齢による特定能力水準の割合（男性）

（%）

能力水準		年齢	70-79歳	50-59歳	30-39歳	10-19歳
		学齢期の年代	1810	1830	1850	1870
1	読み書きできない者		51	48	35	24
2	名前と住所が書ける者		25	33	39	48
3	日々出納帳がつけられる者		9	12	19	20
4	普通の文書が読めて、証券等に記入できる者		9	1	5	3
5	通常の商売のやり取りができる者		0	3	1	2
6	政府の布告や新聞社説が読める者		6	3	1	3

リチャード・ルビンジャー『日本人のリテラシー』226頁より転載

図２　鹿児島・岡山・滋賀県の男女別非識字率の比較



リチャード・ルビンジャー『日本人のリテラシー』259頁より転載

問一　文中傍線部Ａの中の「観念」という語は、「物事についての考えや意識」という意味をもつことばです。ここでの「七歳まで（「七つ前」ともいう）は神のうちという観念」とはどのようなことを指しますか。問題文中より一続きの２０字で答えなさい。

問二　文中傍線部Ｂについて、次の（　１　）（　２　）の問いに答えなさい。

（　１　）傍線部Ｂの内容を次のようにまとめました。（　　）の字数に当てはまる言葉を問題文中からさがしてそれぞれ答えなさい。

子ども観は江戸時代になって、（　①　７字　）にされ、小児の（　②　６字　）して、（　③　１１字　）育てるというように変化した。

（　２　）このように「子育て」が変化したのはなぜだと説明していますか。

問三　文中（　あ　）（　い　）（　う　）に入れるのに適切なものを、次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　能力は部分的であった
イ　幅（はば）広く存在していた
ウ　着実に減少
エ　着実に増加
オ　少しずつ増えています
カ　ほとんど増えていません

問四　文中（　え　）に入れるにふさわしい数字を答えなさい。

問五　文中傍線部Ｃの「この点」を文中の言葉を使って説明しなさい。

問六　図２と本文を読み取って、明らかにあてはまらないものを、次から選び記号で答えなさい。

ア　各地域の「男性」は時代を経るにしたがい識字率が高くなる。

イ　各地域をひとまとめにして識字率を出す事は正確ではない。

ウ　岡山県の「女性」は時代ごとに非識字率が減少している。

エ　滋賀県のデータは、他の件より調査年数が長い。

問七　問題文を説明内容の展開から、次の３つの内容でまとめました。２と３の内容を説明している段落はどこから始まりますか。その段落の初め７字をそれぞれ答えなさい。

１　江戸時代の子育てについて

２　寺子屋での学びについて

３　どれくらいの百姓が読み書きができたのか

２０２４年度

第一回　一般入試問題

国語・解答用紙

聖学院中学校

受験番号	座席番号	名前

一		二									三						
問一	問二	問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八		問一		問二		問三	問四	問五	問六	問七
1	1	C			1								1	あ					2
													①						
													③						
		D												い					
2																			
	2																		
		F												う					
3																			
																			3